

王陽明資料の新研究

―龍場に至るまで―

劉 珉

中国明代の一人の士大夫、王陽明（諱は守仁、字は伯安、浙江餘姚県の人、弘治十二年の進士）はその盛名のわりには、一度もほかの歴史的人物のように当時の資料を総動員してその真実の姿を調べられたことはなかったように思われる。とくにここ二・三十年、板本の影印出版やインターネットの発達など研究環境の急激な変化で、研究者の見られる資料の範囲は爆発的に拡大しており、そうした中で従来の研究を振り返ると、どうもその成り立っている資料的基盤がかなり危ういもののように見えてくる。

ただ、陽明の経歴について着実に調べられたことのないのには、恐らくもつと深い理由がある。それは現在の学術的問題意識からすれば、その経歴が十分有意義な研究対象にならないからではなからうか。もちろん、陽明の思想にはその波瀾に満ちた人生の経験や、現実の社会で挙げた目覚ましい成果がもとになっていることは、誰しも認めるところであろうが、いざ研究となると、結局、思想は思想、生涯は生涯というように切り分けて処理せざるを得ないことになっているようである。しかし、陽明はふつうの思想家と違い、「事上磨錬」をことさら強調して思想自体を語ることにはそれほど意欲をもっていなかった。そのような人物に対して、思想を思想の中で完結させるような研究の仕方は果たしてどこまで通用するであろうか。

本論文はひとまず陽明の思想を解明することを目指さない。また、細かい事実を考証して従来の伝記を補訂することを目的としているわけでもない。ともかく、陽明を一人の人間として扱い、その各時期について明代の史料群から確実に豊かな姿を読み取ろうとする。ここで大事なのは、その学説や経歴の骨組みではなく、むしろその肉付きであり豊かさである。そうすることによって浮かび上がってくる陽明ならではの特質にこそ、その思想や生涯を理解する鍵があるのではないかと筆者には感じられる。

以上のような発想をもとに、本論文は『年譜』など後世の編纂資料よりも、陽明本人および周辺の人々が執筆した一次資料を考証の上で利用し、それによって陽明の思想と生涯の両面にわたる本当の姿を見ようとする。対象となる時期は、初めて原資料が確認される進士登第以前から龍場に左遷されるまでとする。この龍場以前の時期は、陽明がまだ心即理のような思想を唱えていないため、従来本格的な研究対象とはならなかったが、実は思想家として自立していない若い頃の遍歴にこそ、その持つて生まれた特質や将来への可能性がよりはっきり読み取れるのではないかと考えられる。また、この時期について研究できるようになったのは、永富青地氏によって進められた文献学的研究や東景南氏の陽明関係資料に対する網羅的な渉獵に負うところが大きい。それら先行研究を踏まえたうえで、本論文は龍場に至るまでの陽明の資料として以下のものを見出した。なお、序章で説明しているように、貴州本『文録』は中国人民大学図書館蔵『陽明先生文録』三卷、貴州本『続編』は上海図書館蔵『新刊陽明先生文録続編』三卷を指す。

- ① 「祭外舅介菴先生文」(『姚江諸氏宗譜』六) …… 弘治八年四月
- ② 「高平県志序」(『続編』四) …… 弘治八年
- ③ 「送黄敬夫先生僉憲広西序」(『続編』四) …… 弘治八年末

- ④ 「慶呂素庵先生封知州序」(『統編』四)……弘治八年～九年
- ⑤ 「送李柳州序」(『統編』四)……弘治九年四月頃
- ⑥ 「送駱蘊良潮州太守序」(『統編』四)……弘治九年六月頃
- ⑦ 「送陳懷文尹寧都序」(『統編』四)……弘治九年
- ⑧ 「送呂丕文先生少尹京丞序」(『統編』四)……弘治九年八月～九月初め
- ⑨ 「太白樓賦」(『外集』一)……弘治九年十月
- ⑩ 「賀監察御史姚_亮應_隆考績推恩序」(『統編』四)……弘治十年～十一年
- ⑪ 「送紹興修太守序」(『統編』四)……弘治十二年
- ⑫ 「大伾山賦」(河南省濬県の石刻、写真は故宮博物院・紹興博物館ほか編『王陽明書法作品全集』故宮出版社、二〇一七、二〇七頁)……弘治十二年九月
- ⑬ 「送張侯宗魯考最還治紹興序」(『統編』四)……弘治十三年三月
- ⑭ 「陳言辺務疏」(『別録』一)……弘治十三年五月
- ⑮ 「時雨賦」(『邵文莊公年譜』四十一歳の条)……弘治十三年六月
- ⑯ 「奉石谷呉先生書」(貴州本『統編』一)……弘治十三年
- ⑰ 「提牢庁壁題名記」(『統編』四)……弘治十三年十月
- ⑱ 「重修提牢庁司獄司記」(『統編』四)……弘治十三年十月
- ⑲ 「送方寿卿広東僉憲序」(『統編』四)……弘治十三年末
- ⑳ 「来雨山雪図賦」(『統編』四)……弘治十三年末
- ㉑ 「春郊賦別引」(『統編』三)……弘治十四年春
- ㉒ 「遊齊山賦_{并序}」(正徳『池州府志』九)……弘治十五年正月
- ㉓ 「九華山賦」(『外集』一、正徳『池州府志』九)……弘治十五年正月
- ㉔ 「行書致舫齋手札」(截玉軒所蔵の墨跡、写真は上海書画出版社編『宋元明清法帖墨跡』上海書画出版社、二〇〇八、四〇～四一頁)……弘治十五年正月
- ㉕ 「題湯大行殿試策問下」(『外集』六)……弘治十五年春
- ㉖ 「乞養病疏」(『別録』一)……弘治十五年八月
- ㉗ 「易直先生墓誌」(『外集』七)……弘治十五年十月
- ㉘ 「羅履素詩集序」(『外集』四)……弘治十五年後半
- ㉙ 「興国守胡孟登生像記」(『外集』五、嘉靖『湖広図経志書』二)……弘治十五年後半
- ③⑩ 「兩浙觀風詩序」(『外集』四)……弘治十五年か
- ③⑪ 「平樂同知尹公墓誌銘」(『外集』七)……弘治十六年始め頃
- ③⑫ 「答佟太守求雨」(『外集』三)……弘治十六年五月～八月
- ③⑬ 「南鎮禱雨文」(『外集』七)……弘治十六年五月～八月
- ③⑭ 「陳処士墓誌銘」(『外集』七)……弘治十六年九月頃
- ③⑮ 「新建預備倉記」(『外集』五)……弘治十六年九月～十月頃
- ③⑯ 「平山書院記」(『外集』五)……弘治十六年～十七年前半
- ③⑰ 「王陽明先生若耶帖墨妙」(博文堂、一九一三)……弘治十七年閏四月
- ③⑱ 「黄樓夜涛賦」(『統編』四)……弘治十七年七月
- ③⑲ 「山東鄉試録序」(『外集』四、上海図書館蔵『弘治十七年山東鄉試録』巻首)……弘治十七年八月
- ④⑩ および『山東鄉試録』(『全書』三一下、または前書)……弘治十七年八月
- ④⑩ 「二与徐仲仁」(『統編』一・家書墨迹四首)……弘治十七年冬

- ④1 「鴻泥集序」(『統編』四) ……弘治十七年十二月～十八年初
- ④2 「寿楊母張太孺人序」(『統編』四) ……弘治十八年六月
- ④3 「对菊聯句序」(『統編』四) ……弘治十八年九月
- ④4 「豫軒都先生八十受封序」(『統編』四) ……弘治十八年十月
- ④5 「答陳文鳴」(貴州本『統編』二) ……弘治十八年末
- ④6 「東曹倡和詩序」(『統編』四) ……正徳元年三月
- ④7 「性天卷詩序」(『統編』四) ……正徳元年か
- ④8 「答懋貞少参」(貴州本『統編』一) ……正徳元年後半
- ④9 「答王応韶」(貴州本『統編』二) ……正徳元年九月～十月
- ⑤0 「乞宥言官去權姦以章聖徳疏」(『別録』一) ……正徳元年十月～十一月
- ⑤1 「答言」(『外集』一、『居夷集』三) ……正徳元年十一月～十二月
- ⑤2 「答徐成之」(『文録』一、貴州本『文録』一) ……弘治十八年～正徳二年
- ⑤3 「示徐曰仁応試」(『外集』六) ……正徳二年夏～秋
- ⑤4 「答徐子積」(貴州本『統編』二) ……正徳二年冬
- ⑤5 「陳直夫南宮像贊」(『外集』七) ……正徳二年冬か
- ⑤6 「別三子序」(『文録』四) ……正徳二年冬
- ⑤7 「王守仁詩札卷」(中国国家博物館所蔵の墨跡、写真は前掲『王陽明書法作品集』二八～三三頁) ……正徳三年二月
- ⑤8 「答文鳴提学」(貴州本『統編』一) ……正徳三年春
- ⑤9 「澹然子序」(『統編』四) ……正徳三年春
- ⑥0 「吊屈平賦」(『外集』一、『居夷集』一) ……正徳三年春

第一章 進士登第以前

第一章では、進士登第以前の陽明について自分と他者の両方の資料から検討した。まず第一節「弘治九年の状況」は、他者の資料によって検討したものであるが、そこからわかったことは以下の通りである。

陽明は弘治六年、同九年の二回の会試に落第したことがよく知られているが、現在のところ、一次資料の中で彼の姿がはっきりと読み取れるのは、この二回目の落第をした弘治九年にさかのぼる。二月に落第した陽明は、九月になると一旦故郷に帰るが、その帰郷に対して、都の少なくとも六人の士大夫が送別詩を作ったことが確認できる。この六人は、劉大夏・顧清・石瑤・毛紀・趙寛・喬宇であるが、そのうち注目すべきなのが喬宇である。弘治九年に進士に登第した顧璘(号は東橋)の証言によれば、当時の都では、喬宇・邵宝・儲罐・王雲鳳という四人の中堅官僚が文壇を牽引していた。有名な李夢陽はその時にまだ頭角を現しておらず、この四人は夢陽ら前七子が登場する前の文学的領袖だったというのである。四人はいずれも都の北京で陽明と付き合ったことがあるが、中でもとりわけ喬宇と陽明との関係が深かった。陽明より八歳年長の喬宇は、晩年近くまで陽明と親交を結んだほか、この送別詩に見られたように、実は進士登第以前の、まだ二十五歳の太学生であった陽明をもよく知っていたのである。喬宇の文集は南京図書館と台湾の国家図書館に所蔵され、従来利用されることが少なかったが、陽明の前半生をたどるには、彼とその書いた詩文は重要な視点となるはずである。

送別詩を作った六人のうち喬宇以外はほとんど父王華の関係者であることもわかる。

王華は状元で科挙に合格した者であり、状元の通例として翰林院にも長く奉職した。それのおかげで、陽明は若い頃から都の一流士大夫と付き合う機会に恵まれた。そしてそれらの士大夫からは、ほぼ口を揃えて陽明の文学的才能を高く評価したのである。さらに弘治九年六月二十日に王華親子の自宅で開かれた宴会という実例もある。当時、王華は進士同年の婁性のために送別会を開き、翰林院関係者を中心に集まった十人ほどのメンバーに交じって陽明も参会した。席上でめいめいが聯句を作って計十七首の詩を残したというが、進士登第以前の陽明はこのように父親の社交にも加わって詩文の応酬をしていたのである。また、婁性は有名な婁諒（号は一斎）の長男であり、恐らく寧王宸濠との関係で史書からは抹殺されたようであるが、陽明は彼に好んで接していた。

右に触れた人物のほとんどがみずからも文集（四部分類でいえば集部の別集）を残している。ここに述べた事実も、それらの文集から見出したものであるが、このように士大夫の文集を利用すれば、当時の様子や人々の営為をより具体的に、しかも信頼できる情報として知ることができる。それについて本節ではもう一つの実例が示された。国立公文書館所蔵の顧応祥『崇雅堂詩集』巻一に「海寇篇用王伯安弘治丙辰即事五十韻」という詩があり、それによって弘治九年の陽明に「即事五十韻」という北方辺境の戦争に寄せる詩作もあつたことがわかる。「即事五十韻」そのものは現在見られないにしても、顧応祥の和韻詩からその規模や脚韻を類推することができ、当時の陽明は強い文学的意欲のほかに、軍事にも関心を持っていたことが確認できる。

第二節「陽明本人の資料」は、この時期に書かれた陽明自身の資料で現在何が残っているかを見定め、その性格を一つひとつ検討したものである。その結果、進士登第以前の陽明が残した資料は一覧表の①～⑩があり、それらの資料からは従来考えられていたような朱子学との葛藤に悩む陽明ではなく、文学の交流を通して都の士大夫社会に没入し、最後にはかろうじてそこから脱皮しようとした若者の姿が読み取れた。ということは、二十代の陽明に決定的な影響を与えたのは、朱子学よりもまず士大夫社会の慣習や通念だったと考えられる。その慣習や通念は多くの場合、華麗な文学的装飾を施されているが、実際には功名を重視するなど、個人や家族の利益追求を肯定するような内容が多い。それはある意味で世俗的な考え方であろうが、ただふつうの「世俗」ではなく、都の中心地で見せられた全国最上級の「世俗」であつた。そして⑩に見られたように、そのような「世俗」から脱皮しようとしたとき、陽明の力になったのが科挙受験の際に勉強した学問・思想だったのである。

本章の検討によって、陽明は朱子と異なる生い立ちをしたことも判明する。道学の系譜に連なる父や師を持つ朱子とは違って、陽明はそのような学統を何も背負っていない。よく婁諒の影響を強調して朱子における李侗になぞらえるが、実際には①で見たように、陽明はただ岳父一家の慌ただしい帰郷の途中婁諒に謁見したにすぎず、それも諒の墓誌銘に「四方の士夫信を過ぎ、造謁せざるは無し」（張元禎「一斎婁先生墓誌銘」、『東白張先生文集』一四）とあるように、士大夫は誰でも広信を通る時にそうしていたのである。朱子は二十代から三十代の十年にわたって李侗に師事したが、陽明が十八歳に一度だけ会った婁諒との関係は、それと比べものにならないほど薄いと言えよう。

また、陽明が身を置いた都の士大夫社会の状況もある程度見えてくる。当時、士大夫は職務のかたわら、よく文学を通して互いに交流し、親睦を深める。そのように文学によって築かれた交友関係を当時の言葉では「交遊」と言うが、都の士大夫社会はまさに

「交遊」の世界だったといえる。「交遊」の具体的内容は、基本的に同年・同郷・同僚という三種の関係で人々がまず結びつき、そして赴任や帰郷のために離れる仲間に対する送別、あるいはその父母の誕生日や朝廷からの恩賞に対する祝賀といった機会に「交遊」同士が集まり、文人としての力量を示し合うというものであった。もちろん、例外として陽明と喬宇のように三種いずれの関係でもない場合があり、②⑨のように送別・祝賀以外の場面もあるが、全体としては以上のような形だったと考えられる。そのような形の「交遊」が、陽明が進士に登第し文壇の中心が喬宇ら四人から李夢陽をはじめとする前七子へと変わった後もなお都で盛んに行なわれ、結局、陽明の北京時代における活動の最大の背景となったように思われる。

第二章 刑部主事時代

陽明は弘治十二年三月に進士に登第し、一年間の觀政進士という見習期間を経て、翌十三年六月に初任官として刑部主事を授けられ、そして山東郷試の考試官としての業務が終わる十七年九月頃まで、一時的な帰郷や出張を除いてずっとこの職にあった。第二章では、この時期を「刑部主事時代」として一括し、陽明が残した資料をすべて集めてその年代や性格を検討した。

第一節「觀政進士」は、陽明が登第してから初任官を授かるまでの期間を扱い、一覽表の⑪～⑭を検討した。第二節「刑部主事」は、この職を任命された後の北京勤務時期を扱い、⑮～⑳の資料を検討した。十四年八月に陽明は南京地域への出張を命じられ、翌十五年夏に帰任したが、第三節「南京出張」はその出張時期を扱い、とくに帰途中の十五年春に集中して見られた㉒～㉕の資料を検討した。都に戻った陽明はまもなく休暇を願い出て帰郷し、それは十五年八月から十七年秋の二年にわたったが、第四節「一時帰郷」はこの時期を扱い、㉖～㉘の資料を調査した。二年後の上京途中、陽明は招聘を受けて山東郷試を主宰したが、第五節「山東郷試」は山東における陽明の行動と、『山東郷試録』をめぐる資料の問題を検討した。一覽表のうち㉙がそれに当たる。

この刑部主事時代は、陽明が進士の仲間入りをしてみずから士大夫社会でつなかりを持つようになっただけに、父の関係者との付き合いは影を潜めるが、資料に現れたその生活ぶりから見て、基本的に進士登第以前の延長線上にあったものと考えられる。この時代の陽明の交遊をうかがうには、㉑が重要な資料となる。そこには、帰郷する仲間を送別するために、陽明と五人の友人が連日のように集まって詩文を作る様子が記されている。帰郷するのは錢榮、五人の友人は杭済・秦金・徐守誠・楊子器・杭淮であるが、いずれも当時の都関係の資料にはよく見られる人物であるとともに、陽明の北京時代の重要な仲間だったようである。とはいえ、本章の検討はまだ初歩的なものであり、それほど価値のある結論を出せているわけではない。二年にわたる帰郷はふつう陽明が仏教と道教に耽溺するピーク時期とされるが、そのイメージと第四節に挙げた一次資料とはどう折り合えばよいかという問題など、今後の課題となるところが多い。

第三章 兵部主事時代

休暇から復帰した陽明は、改めて兵部主事の職を授けられるが、それは龍場駅の駅丞に左遷される正徳元年十二月まで続いた。第三章では、左遷が決まったあと都を離れるまでの準備期間も含めてこの時期を「兵部主事時代」とし、陽明に関係する一次資料を

できるだけ集めて分析した。

第一節「弘治十七年十月～十八年」は標題の示す期間の資料、④⑤および上海博物館所蔵の「詞林雅集図」を検討し、第二節「正徳元年～二年閏正月」は年号が改まったこの時期の④⑥～⑤①を中心に分析した。第三節「出發と送別」は、龍場への赴任をめぐる陽明と友人との詩文の贈答を詳しく見て、最後に⑤②について考察した。

この時代の資料は、「詞林雅集図」のように今まで通りの交遊ぶりを示す例もある一方で、④⑤では「身心の功」についての悩みを打ち明け、④⑦④⑧では思想的立場を表明し、④⑨では講学への強い情熱を見せているように、明らかに思想性が強くなっている。陽明がこのような思想へと傾斜するのには、それ以前の帰郷や山東郷試の経験が作用しているであろうが、さらに弘治帝の崩御に伴う政治的混乱という環境の急変も影響していると考えられる。④③④④に見られるように、帝の崩御は都の雰囲気には暗い影を落としており、その中で陽明は隠逸的な生き方に共感を覚えたが、そのように官界から身を引きたい分、内面に沈潜する思想的な関心も強くなるように考えられる。ただ一方、若い頃から熱い政治的理想を抱く陽明は、この朝政の危機に際して皇帝への諫言も行なった(⑤⑩)。それが奏功せず、みずからも牢獄につながれるはめになったが、この挫折によって、陽明は龍場での生活を余儀なくされるだけでなく、その後の方向性まで大きく規定されることになったと考えられる。

第四章 龍場に至る道程

都を後にした陽明は正徳二年三月頃に浙江省の杭州まで来たあと、そこにとどまってそれ以上龍場へ向かおうとはしなかった。周辺地域をあちこち回った末、翌三年の初めによりやく赴任の途に就いたのであるが、第四章では、この途中のことも含めて陽明の龍場時期について初歩的な検討をした。

第一節「龍場への赴任」は赴任途中のことを扱うものであり、その時期の資料として一覧表の⑤③～⑥①があることが筆者の予備調査でわかったが、それぞれの年代を証明して内容を分析することは、本論文ではできなかった。

第二節「結びにかえて」は陽明の龍場経験についての初歩的考察である。龍場時期の全資料から明らかにしたのは、当時の客観的状況は伝記資料ないしは陽明自身が表現しているほど危機的なものではないこと、有名な心即理や格物説などの理論構築はこの時期ではまだ見えていないことである。龍場当時の実状を伝える資料に、席書の陽明に宛てた計四通の文書がある。それは彼の文集『元山文選』五卷(北京大学図書館蔵)に保存されているものであるが、巻一「送別陽明王先生序」に陽明の学問を「其の要切を究むるに、喜怒哀楽已発未発の間に於いて、尤も力を致す」とまとめているなど、龍場大悟を再考するうえで重要な手がかりを与えてくれるのである。

付録 政治の中の王陽明

付録は、筆者の既発表の論文をほぼそのまま再録したものである。第一節には「王陽明の江西時代における「思帰」をめぐる」(『東洋の思想と宗教』三四、二〇一七)、第二節には「最晩年の王陽明に見られる政治志向について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六三、二〇一八)を収めているが、いずれも四十六歳以降、地方政治について重責を担うようになった陽明を扱うため、まとめて「政治の中の王陽明」としておいた。